
芥川龍之介全集

4

筑摩全集類聚

筑摩書房

芥川龍之介全集第四卷

昭和四十六年六月五月初版第一刷発行
昭和四十九年六月初版第四刷発行

著者 芥川龍之介

発行者 井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話東京 〇七六五二（代表）
振替東京 四一〇一三
郵便番号 一〇一一九一

印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社 積信堂

(分類) 0393 (製品) 72004 (出版社) 4604

第四卷
目次

小説

手紙

三つの窓

齒車

闇中間答

夢

或阿呆の一生

隨筆

骨董羹

雜筆

点心

本の事

支那の画

野人生計事

三 八 五 元 四 五

充 公 本

二 〇 八 二 二 二 二 七

続野人生計事	一三
澄江堂雜記	一三
続澄江堂雜記	一五
葬儀記	一七
糶牛の事	一八
文学好きの家庭から	二八
鑑定	二八
一番気乗のする時	二九
はつきりした形をとるために	二九
イズムと云ふ語の意味次第	二九
永久に不愉快な二重生活	二七
俳画展覧会を觀て	二七
入社 の 辞	二七
龍村平藏氏の芸術	二四
一つの作が出来上るまで	二五
文章と言葉と	二七
西洋画のやうな日本画	二七
世の中と女	二九
売文問答	二八
近頃の幽霊	二八
八宝飯	二八
伊東から	二九
大正十二年九月一日の大震に際して	二九
鸚鵡	二八
解嘲	二八
正岡子規	二五
「仮面」の人々	二六
案頭の書	二七
リチャード・バアトン訳「一千一夜物語」に就いて	二二

蒐書

娼婦美と冒険

わが俳諧修業

学校友だち

田端人

日本小説の支那訳

念仁波念遠入札帖

日本の女

結婚難並びに恋愛難

変遷その他

偽者二題

才一巧亦不二

病牀雜記

風変りな作品に就いて

身のまはり

翻訳小品

二六

二七

二八

二〇

二三

三五

三七

三九

三八

三六

二四

二四

二四

二四

二四

二四

孔雀

拊掌談

病中雜記

一人の無名作家

東西問答

又一説?

亦一説?

比呂志との問答

無題

その頃の赤門生活

小説の読者

食物として

僕の友だち二三

講演軍記

わが家の古玩

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

小品

大川の水	二五	東洋の秋	二〇
「ケルトの薄明より」〔翻訳〕	二七	動物園	二二
創作	二八	LOS CAPRICHOS	二九
出帆	二六	パステルの龍	二四
蛙舌	二七	長崎小品	二六
饒舌	二八	漱石山房の冬	三〇
南瓜	二九	わが散文詩	三三
京都日記	三〇	商賈聖母	三六
惡魔	三一	かちかち山	三八
窓	三二	教訓談	三九
着物	三三	鷺と鴛鴦	四〇
忘れられぬ印象	三四	雪	四一
東京小品	三五	詩集	四二
沼	三六	ピアノ	四三
寒山拾得	三七	臘梅	四四

沙羅の花	三二
微笑	三三
虎の話	三四
二人の友	三五
横須賀小景	三六
囁　語	三七
O君の春秋	三八
夢	三九
鴉　片	四〇
槐	四一
鬼ごっこ	四二
僕　　は	四三
或社会主義者	四四
追　　憶	四五
本所両国	四六
解　　説	四七

塵　　勞	四八
貝　　殻	四九
春の夜は	五〇
軽井沢で	五一
都会で	五二
女　　仙	五三
仙　　人	五四
耳目記	五五
素描三題	五六
機関車を見ながら	五七
凶	五八
鴿沼雜記	五九
吉　田　精　一	六〇
	六一
	六二
	六三
	六四
	六五
	六六
	六七
	六八
	六九
	七〇
	七一
	七二
	七三
	七四
	七五
	七六
	七七
	七八
	七九
	八〇
	八一
	八二
	八三
	八四
	八五
	八六
	八七
	八八
	八九
	九〇
	九一
	九二
	九三
	九四
	九五
	九六
	九七
	九八
	九九
	一〇〇

芥川龍之介全集 第四卷

手紙

僕は今この温泉宿に滞在してゐます。避暑する気もちもないではありません。しかしまだその外にゆつくり読んだり書いたりしたい気もちもあることは確かです。こゝは旅行案内の広告によれば、神経衰弱に善いとか云ふことです。そのせむか狂人も二人ばかりゐます。一人は二十七八の女です。この女は何も口を利かずに手風琴ばかり弾いてゐます。が、身なりはちやんとしてゐますから、どこか相当な家の奥さんでせう。のみならず二三度見かけた所ではどこかちよつと混血児じみた、輪廓の正しい顔をしてゐます。もう一人の狂人は赤あかと額の禿げ上つた四十前後の男です。この男は確か左の腕に松葉の入れ墨をしてゐる所を見ると、まだ狂人にならない前には何か意気な商売でもしてゐたものかも知れません。僕は勿論この男とは度たび風呂の中でも一しよになります。K君は（これはここに滞在してゐる或大学の学生です。）この男の入れ墨を指さし、いきなり「君の細君の名はお松さんだね」と言つたものです。するとこの男は湯に浸つたまま、子供のやうに赤い顔をしました。……

K君は僕よりも十も若い人です。おまけに同じ宿

のM子さん親子と可也惡意にしてゐる人です。M子さんは昔風に言へば、若衆顔をしてゐるとでも言ふのでせう。僕はM子さんの女学校時代にお下げに白い後ろ鉢巻をした上、薙刀を習つたと云ふことを聞き、定めしそれは牛若丸か何かに似てゐたことだらうと思ひました。尤もこのM子さん親子にはS君もやはり交際してゐます。S君はK君の友だちです。唯K君と違ふのは、——僕はいつも小説などを読むと、二人の男性を差別する為一人を肥つた男にすれば、一人を瘠せた男にするのをちよつと滑稽に思つてゐます。それから又一人を豪放な男にすれば、一人を纖弱な男にするのにもやはり微笑まづにはゐられません。現にK君やS君は二人とも肥つてはゐらないのです。のみならず二人とも傷き易い神経を持つて生まれてゐるのです。が、K君はS君のやうに容易に弱みを見せません。實際又弱みを見せない修業を積まうともしてゐるらしいのです。

K君、S君、M子さん親子、——僕のつき合つてゐるのはこれだけです。尤もつき合ひと言つたにしろ、唯一しよに散歩したり話したりする外はありません。何しろここには温泉宿の外に（それもたつた二軒だけです。）カツフェー一つないのです。僕はかう云ふ寂しさを少しも不足には思つてゐません。しかしK君やS君は時々「我等の都会に対する郷愁」と云ふものを感じてゐます。M子さん親子も、——M子さん親子の場合は複雑です。M子さん親子は貴

① 手風琴 アコード
イオンの和名。

② 若衆顔 若衆は元服前の前髪のある若者の通称。また男色を業とする美少年をも言い、若衆姿をした娼を若衆女郎といひ、略して若衆ともいふ。

③ 薙刀 反りかえつた長い木刀に長い柄をつけたもの。もと女学校で教えた。

④ 牛若丸 平安末期の武將源義経の幼名。京の五条の大橋での弁慶との試合で有名。

族主義者です。従つてかう云ふ山の中に満足してゐる訣はありません。しかしその不満の中に満足を感じてゐるのです。少くとも彼は一月だけの満足を感じてゐるのです。

僕の部屋は二階の隅にあります。僕はこの部屋の隅の机に向かひ、午前だけはちやんと勉強します。午後はトタン屋根に日が当るものですから、その烈しい日照りだけでも到底本などは読めません。では何をするかと言へば、K君やS君に来て貰つてトランプや将棋に閑をつぶしたり、組み立て細工の木枕をして（これはこの名産です）昼寝をしたりするだけです。五六日前の午後のことです。僕はやはり木枕をしたまま、厚い渡紙の表紙をかけた「大久保武蔵鑑」を読んでゐました。するとそこへ襖をあけていきなり顔を出したのは下の部屋にゐるM子さんです。僕はちよつと狼狽し、莫迦莫迦しいほどちやんと坐り直しました。

「あら、皆さんはいらつしやいませんの？」

「ええ。けふは誰も、……まあ、どうかおはひりなさい。」

M子さんは襖をあけたまま、僕の部屋の縁先に佇みました。

「この部屋はお暑うございますわね。」

逆光線になつたM子さんの姿は耳だけ真紅に透いて見えます。僕は何か義務に近いものを感じ、M子さんの隣に立つことにしました。

「あなたのお部屋は涼しいでせう。」

「ええ、……でも手風琴の音ばかりして。」

「ああ、あの氣違ひの部屋の向うでしたね。」

僕等はこんな話をしながら、暫く縁先に佇んでゐました。西日を受けたトタン屋根は波がたにぎらざらかがやいてゐます。そこへ庭の葉桜の枝から毛虫が一匹転げ落ちました。毛虫は薄いトタン屋根の上にかすかな音を立てたと思ふと、二三度体をうねらせたり、すぐにぐつたり死んでしまひました。それは実に呆つ氣ない死です。同時にまた実に世話の無い死です。――

「フライ鍋の中へでも落ちたやうですね。」

「あたしは毛虫は大嫌ひ。」

「僕は手でもつまめますがね。」

「Sさんもそんなことを言つていらつしやいました。」

M子さんは真面目に僕の顔を見ました。

「S君もね。」

僕の返事はM子さんには氣乗りのしないやうに聞えたのでせう。（僕は実はM子さんに、――と云ふよりもM子さんと云ふ少女の心理に興味を持つてゐたのですが）M子さんは幾分か拗ねたやうにかう言つて手すりを離れました。

「ぢや又後ほど。」

M子さんの歸つて行つた後、僕は又木枕をしながら、「大久保武蔵鑑」を読みつづけました。が、活

⑤ 木枕 つけ・朴などの木で作る。箱枕ともいう。箱の上に蒔絵などもする。

⑥ 渡紙 洗柿の液を浸み込ませた紙。薄褐色半透明で防蝕性を有する。包装などに用いる。

⑦ 大久保武蔵鑑 江戸時代において広くよまれた実録本、作者不詳。大久保彦左衛門を中心とした物語で、江戸時代の側面史として興味があつた。歌舞伎・講談になつてゐる。

字を追ふ間に時々あの毛虫のことを思ひ出し
た。……

僕の散歩に出かけるのはいつも大抵は夕飯前です。かう云ふ時にはM子さん親子をはじめ、K君やS君も一しよに出るのです。その又散歩する場所もこの村の前後二三町の松林より外にはありません。これは毛虫の落ちるのを見た時よりも或は前の出来事です。僕等はやはりはしやぎながら、松林の中を歩いてゐました。僕等は？——尤もM子さんのお母さんだけは例外です。この奥さんは年よりは少くとも十位はふけて見えるのでせう。僕はM子さんの一家のことは何も知らないものの一人です。しかしいつか読んだ新聞記事によれば、この奥さんはM子さんとM子さんの兄さんを産んだ人ではない筈です。M子さんの兄さんはどこかの入学試験に落第した為にお父さんのピストルで自殺しました。僕の記憶を信ずるとすれば、新聞は皆兄さんの自殺したのもこの後妻に來た奥さんに責任のあるやうに書いてゐました。この奥さんの年をとつてゐるのも或はそんな為ではないでせうか？僕はまだ五十を越してゐないのに髪は白い奥さんを見る度にどうもそんなことを考へ易いのです。しかし僕等四人だけは兎に角しやべりつづけにしゃべつてゐました。するとM子さんは何を見たのか、「あら、いや」と言つてK君の腕を抑へました。

「何です？僕は蛇でも出たのかと思つた。」

それは實際何でもなし。唯乾いた山砂の上に細かい蟻が何匹も半死半生の赤蜂を引きずつて行かうとしてゐたのです。赤蜂は仰けになつたなり、時々裂けかかつた翅を鳴らし、蟻の群を逐ひ払つてゐます。が、蟻の群は蹴散らされたと思ふと、すぐに又赤蜂の翅や脚にすがりついてしまふのです。僕等はそこに立ちどまり、暫くこの赤蜂のあがいてゐるのを眺めてゐました。現にM子さんとも始めに似合はず、妙に真剣な顔をしたまま、やはりK君の側に立つてゐたのです。

「時々剣を出しますわね。」

「蜂の剣は鉤のやうに曲つてゐるものです。」

僕は誰も黙つてゐるものですから、M子さんとなんか話をしてゐました。

「さあ、行きませう。あたしはこんなものを見るのは大嫌ひ。」

M子さんのお母さんは誰よりも先きに歩き出しました。僕等も歩き出したのは勿論です。松林は路をあまりしたまま、ひっそりと高い草を伸ばしてゐました。僕等の話し声はこの松林の中に存外高い反響を起しました。殊にK君の笑ひ声は——K君はS君やM子さんにK君の妹さんのことを話してゐました。この田舎にゐる妹さんは女学校を卒業したばかりらしいのです。が、何でも夫になる人は煙草ものまなければ酒ものまない、品行方正の紳士でなければならぬと言つてゐると云ふことです。

「僕等は皆落第ですね？」

S君は僕に言うひました。が、僕の目にはいちらしい位、妙にてれ切つた顔をしてゐました。

「煙草のまなければ酒ものまないなんて、……つまり兄貴へ当てつけてゐるんだね。」

K君も咄嗟につけ加へました。僕は善い加減な返事をしながら、だんだんこの散歩を苦にし出しました。従つて突然M子さんの「もう帰りませう」と言つた時にはほつとひと息ついたものです。M子さんは晴れ晴れした顔をしたまま、僕等の何とも言はないうちにくりと足を返しました。が、温泉宿へ帰る途中はM子さんのお母さんとばかり話してゐました。僕等は勿論前と同じ松林の中を歩いて行つたのです。けれどもあの赤蜂はもうどこかへ行つてゐました。

それから半月ばかりたつた後です。僕はどんより曇つてゐるせゐか、何をする気もなかつたものですから、池のある庭へおりて行きました。するとM子さんのお母さんが一人船底椅子に腰をおろし、東京の新聞を読んでゐました。M子さんはけふはK君やS君と温泉宿の後ろにあるY山へ登りに行つた筈です。この奥さんは僕を見ると、老眼鏡をはづして挨拶しました。

「こちらの椅子をさし上げませうか？」

「いえ、これで結構です。」

僕は丁度そこにあつた、古い鍍金椅子にかけること

にしました。

「昨晚はお休みになれなかつたでせう？」

「いいえ、……何かあつたのですか？」

「あの氣の違つた男の方がいきなり廊下へ駈け出したりなすつたものですから。」

「そんなことがあつたんですか？」

「ええ、どこかの銀行の取りつけ騒ぎを新聞でお読みなすつたのが始まりなんですつて。」

僕はあの松葉の入れ墨をした氣違ひの一生を想像しました。それから、——笑はれても仕かたはありません、僕の弟の持つてゐる株券のことなどを思ひ出しました。

「Sさんなどはこぼしていらつしやいましたよ。……」

M子さんのお母さんはいつか僕に婉曲にS君のことを尋ね出しました。が、僕はどう云ふ返事にも「でせう」だの「と思ひます」だのとつけ加へました。（僕はいつも一人の人をその人としてだけしか考へられませんか。家族とか財産とか社会的地位とか云ふことには自然と冷淡になつてゐるのです。おまけに一番悪いことはその人としてだけ考へる時でもいつか僕自身に似てゐる点だけその人の中から引き出した上、勝手に好悪を定めてゐるのです。）のみならずこの奥さんの氣もちに、——S君の身もとを調べる氣もちに或可笑しさを感じました。

「Sさんは神経質でいらつしやるでせう？」

⑧ 船底椅子 椅子の坐る部分が弓なりにそつてゐるもの。

⑨ 取りつけ 銀行が信用を失ひ預金者が銀行に殺到して預金を引き出すこと。銀行は倒産する。

⑩ 沢蟹 灰褐色の小柄なかに。本州以南の河川に穴居する。山がに・石がにともいう。

「ええ、まあ神経質と云ふのでせう。」

「人ずれはちつともしていらつしやいませんね。」

「それは何しろ坊ちゃんですから、……しかしもう一通りのことは心得てゐると思ひますが。」

僕はかう云ふ話の中にふと池の水際に沢蟹の這つてゐるのを見つけた。しかもその沢蟹はもう一匹の沢蟹を、——甲羅の半ば砕けかつたもう一匹の沢蟹をじりじり引きずつて行く所なのである。僕はいつかクロボトキンの相互扶助論の中にあつた蟹の話を思ひ出しました。クロボトキンの教へる所によれば、いつも蟹は怪我をした仲間を扶けて行つてやると云ふことです。しかし又或動物学者の実例を観察した所によれば、それはいつも怪我をした仲間を食ふ爲にやつてゐると云ふことです。僕はだんだん石菖のかげに二匹の沢蟹の隠れるのを見ながら、M子さんのお母さんと話してゐました。が、いつか僕等の話に全然興味を失つてゐました。

「みんなの帰つて来るのは夕がたでせう？」

僕はかう言つて立ち上りました。同時に又M子さんのお母さんの顔に或表情を感じました。それはちよつとした驚きと一しよに何か本能的な情しみを閃かせてゐる表情です。けれどもこの奥さんはすぐにもの靜かに返事をしました。

「ええ、M子もそんなことを申してをりました。」

僕は僕の部屋へ歸つて来ると、又縁先の手すりにつかまり、松林の上に盛り上つたY山の頂を眺めま

した。山の頂は岩むらの上に薄い日の光をなすつてゐます。僕はかう云ふ景色を見ながら、ふと僕等人間を憐れたい氣もちを感じました。……

M子さん親子はS君と一しよに二三日前に東京へ歸りました。K君は何でもこの温泉宿へ妹さんの来るのを待ち合せた上、(それは多分僕の帰るのよりも一週間ばかり遅れるでせう) 帰り仕度をするとか云ふことです。僕はK君と二人だけになつた時に幾分か寛ぎを感じました。尤もK君を劬りたい氣もちの反つてK君にこたへることを慎れてゐるのに違ひありません。が、兎に角K君と一しよに比較的氣楽に暮らしてゐます。現にゆうべも風呂にはひりながら、一時間もセザール・フランクを論じてゐました。

僕は今僕の部屋にこの手紙を書いてゐます。ここはもう初秋にはひつてゐます。僕はけさ目を醒ました時、僕の部屋の障子の上に小さいY山や松林の逆さまに映つてゐるのを見つけた。それは勿論戸の節穴からさして来る光の爲だつたのです。しかし僕は腹はひになり、一本の巻煙草をふかしながら、この妙に澄み渡つた、小さい初秋の風景にいつにない靜かさを感じました。……

ではさやうなら。東京ももう朝晩は大分涼しくなつてゐるでせう。どうかお子さんたちにもよろしく言つて下さい。

(昭和二年六月七日)

① クロボトキン P. Kropotkin (1842~1891). ロシアの無政府主義者。『フランス革命史』相互扶助論 など。

② 相互扶助論 "Mutual Aid—A Factor of Evolution". ダーウィン主義が人間による人間の支配、搾取を正当化しているとして反対し、生存競争の外に相互の協力が生物界や人間社会にあることを詳細な観察から主張している。

③ 石菖 てんなんしよ科の植物。水辺に自生する。しよふに似ているがや小さい。初夏に黄色の花をつける。

④ セザール・フランク César Franck (1822~1890)。ベルギー生れの作曲家。ベートルベン・ワグナーなどの影響下にフランス交響楽派を創始した。『交響曲二長調』など。

三つの窓

1 鼠

一等戦闘艦XXの横須賀軍港へはひつたのは六月にはひつたばかりだつた。軍港を囲んだ山々ほどれも皆雨の為に煙つてゐた。元來軍艦は碇泊したが最後、鼠の殖えなかつたと云ふためしはない。——XXも亦同じことだつた。長雨の中に旗を垂らした二万噸のXXの甲板の下にも鼠はいつか手箱だの衣囊だのにもつきはじめた。

かう云ふ鼠を狩る為に鼠を一匹捉へたものには一日の上陸を許すと云ふ副長の命令の下つたのは碇泊後三日にならない頃だつた。勿論水兵や機関兵はこの命令の下つた時から熱心に鼠狩りにとりかかつた。鼠は彼等の力の為に見る見る数を減らして行つた。従つて彼等は一匹の鼠も争はない訣には行かなかつた。

「この頃みんなの持つて来る鼠は大抵八つ裂きになつてゐるぜ。寄つてたかつて引つぱり合ふものだから。」

ガングルウムに集つた将校たちはこんなことを話し

て笑つたりした。少年らしい顔をしたA中尉もやはり彼等の一人だつた。つゆ空に近い人生はのんびりと育つたA中尉にはほんたうには何もわからなかつた。が、水兵や機関兵の上陸したがる心もちは彼にもはつきりわかつてゐた。A中尉は巻煙草をふかしながら、彼等の話にまじる時にはいつもかう云ふ返事をしてゐた。

「さうだらうな。おれでも八つ裂きにし兼ねないから。」

彼の言葉は独身者の彼だけに言はれるのに違ひなかつた。彼の友だちのY中尉は一年ほど前に妻帯してゐた為に大抵水兵や機関兵の上におわざと冷笑を浴びせてゐた。それは又何ごとにも容易に弱みを見せまいとするふだんの彼の態度にも合してゐることは確かだつた。褐色の口髭の短い彼は一杯の麦酒に酔つた時さへ、テブルの上に頬杖をつき、時々A中尉にかう言つたりしてゐた。

「どうだ、おれたちも鼠狩をしては？」

或雨の晴れ上つた朝、甲板士官だつたA中尉はSと云ふ水兵に上陸を許可した。それは彼の小鼠を一匹、——しかも五体の整つた小鼠を一匹とつた為だつた。人一倍体の遅いSは珍しい日の光を浴びたまま、幅の狭い舷梯を下つて行つた。すると仲間の水兵が一人身軽に舷梯を登りながら、丁度彼とすれ違ふ拍子に常談のやうに彼に声をかけた。

「おい、輸入か？」

① 横須賀軍港 横須賀は神奈川県南東部沿岸にある都市。現在は海上自衛隊・米海軍基地がある。

② 手箱 手まわりの品を入れておく箱。

③ 衣囊 海軍の兵士が用いた衣類用の袋。

④ ガングルウム Ganglum Room (英)。士官次室。

⑤ 舷梯 乗り降りのため、舷の横側に設けられたしご。タラップ。